

(様式1)

令和元年11月20日

宮津市議会議長 北仲 篤 様

会 派 名 日本共産党宮津市会議員団

代表者名 長 林 三 代

政務活動費 調査研究(視察)報告書

- 1 視察年月日 令和元年7月26日(金)
- 2 視察先・項目 ① 石部南学区まちづくり協議会
・子ども食堂の取り組みについて

② NPO法人CASN
・活動の取り組みについて
- 3 参加者氏名 長林三代 ・ 小濃孝之 以上 2名
- 4 経 費 26,444円(13,222円/1人あたり)
- 5 添付資料 視察研修行程表・資料(別添のとおり)

政務活動費 調査研究(視察)報告書

7月26日(金) 石部南学区まちづくり協議会

視察項目 ・子ども食堂の取り組みについて

1 視察目的・内容

【目的】

石部南学区まちづくり協議会では、美しい自然や、歴史、伝統、文化を大切にするまちづくりに重点を置いている。また、子どもや高齢者等が安心して暮らせるまちづくり、居場所づくりに取り組んでいる。とりわけ、「にぎわい広場部会」の子ども食堂の取り組みは大きな役割を果たしている。

宮津市でも、地域協議会を立ち上げてまちの活性化に取り組んでいる。そんな中、今年3月、ボランティア団体が子ども食堂の取り組みを始めた。

子どもや高齢者等を中心に据えたまちづくりを推進するためには何が必要なのか、子どもが安心して暮らすことができる環境づくりにどのように取り組んでいけばいいのか、石部南学区まちづくり協議会の子ども食堂の取り組みを学び、宮津市の今後に生かしていく。

【内容】

①1日1食しか食べられない子、母親が朝食をつくらな家庭等、食に欠ける子供が増えてきた中で、平成27年6月に、滋賀の縁創造実践センターより湖南市において子ども食堂を是非開設してほしいとの依頼があり、まちづくり協議会の女性会員(現在は「にぎわい広場部会」)の賛同で、平成28年1月30日に子ども食堂を開店した。

②開催頻度は、無理なく継続できるよう月1回(原則、月末の土曜日)としている。はじめは「食に欠ける子」のみを対象にしていたが、それでは参加しにくいこともあり、子どもはもちろん、高齢者も含めてだれでも参加できるようにし、名称も「子ども食堂」から「ふれあい広場」に変更した。(参加した小学校長によれば、貧困家庭の半分の子どもが参加しているとのこと。)



③参加費は、子どもは無料、大人は200円。毎回、約100人が参加している。メニューは、参加人数が見込と違っても対応できるよう「カレー」のみとしている。スタッフは、現在、まちづくり協議会のメンバー6名、ボランティア6名の計12名。

④毎月、案内チラシを作成し、石部南小学校に持っていき、全校児童に配布を依頼している。また、石部南学区内の各自治会にもチラシを回覧してもらっている。

⑤3年間(平成28~30年度)は、滋賀県社会福祉協議会の「子ども食堂助成金」(3年間で



計 40 万円)を活用し、運営していたが、現在、助成金はなくなり、参加費のみで運営している。財政的には大変だが、野菜類は地域の方からの、米は県社協等からの寄付があり、何とか赤字を出さずにやっている。

⑥食事の後は、「お楽しみ企画」として、紙芝居、折り紙、ドッジボール、万華鏡等を実施している。湖南省にはボランティアグループが 91 もあり、そこに依頼して無償で行ってもらっている。

⑦子供たちや参加されている方から、笑顔で「おいしかったで」といってもらえることがスタッフの活力になっている。また、一人暮らしの高齢者からは「みんなでにぎやかに食べるとおいしいわ〜」と喜んでもらっていることが励みになっている。

2 考察・検証・成果等

【小濃】

①子どもの貧困率が上昇傾向(2015 年の厚労省の調査では、子どもの 13.9%、7 人に 1 人が貧困。宮津市では貧困率は出ていないが、就学援助率(33~34%)からいけば全国の貧困率よりかなり高いと思われる。)にあるなかで、これに比例して「食に欠ける子」も増えてきていると思われる。こうした状況の中で、石部南学区まちづくり協議会の「子ども食堂」の取り組みは、たとえ開催が月 1 回と少なくとも、子どもの居場所づくりや学習支援の役割を果たし、地域のコミュニティーの場となっていることも含めて、貴重な取り組みである。

②滋賀県は 300 カ所の子ども食堂をめざしている。現在、湖南省の子ども食堂の取り組みも含め、104 カ所で開設されている。直接的には滋賀県社協が財政支援しているが、その背景には滋賀県の積極的な支援があると考えられる。宮津市では今年 3 月に 1 カ所で子ども食堂が始まったが、運営を継続していく上で資金調達が大きな課題になっていると聞く。京都府が子どもの貧困の問題を正面から捉え、積極的な支援をしてもらうことを期待したい。

【長林】

子ども食堂にぎわい広場を長続きさせる秘訣は「無理のない範囲で」する、とのことだ。月 1 回ならできる。夜は子ども一人では来れないので昼間だけする。スタッフは 13 人だが都合のつく人に出してもらう。たいてい 7 人~9 人で 100 食分のカレーを作る。ジャガイモや玉ねぎ、にんじんは地域の人からいただく。社協からは人参は何キロいるんや?と聞いてきてくれる。JA や平和堂からは商品券の寄付がある。テーブルには、あじさいなど自宅に咲いている花を飾り、安らぎの一助に。10 時半ごろから子どもたちがうろうろしている。食事は来た人順に、などなど。何とか、かつかつでやっているとのことだ。無理せず、自然体で、地域のみんなで子どもたちを育てていることがよくわかる。あれもしてあげよう、これもしてあげよう、ではない。「無理のない範囲で」というのは、スタッフ同士の議論が必要であり、十分な話し合いがされているのだと思われる。

湖南省にはよし笛や木工、竹トンボ、折り紙、おもちゃの修理のボランティアグループなど、91 ものボランティア団体がある。大人も子どもも集える場所として、にぎわい広場の「お楽しみ企画」を無償で引き受け、いろんな遊びを子どもたちに伝えていることも見逃せない。貧困家庭の子どもだけに限定すると来にくいし来たがらないかなど、大人も子どももオール参加にしましょう。カレーを食べましょう、一緒に遊びましょうというこ

の考え方が、参加する高齢者にも子どもにも安心感を与えるのではないだろうか。構えずに「無理のない範囲で」活動することの大切さを学んだ。

政務活動費 調査研究(視察)報告書

7月26日(金) NPO法人CASN

視察項目 ・活動の取り組みについて

1 視察目的・内容

【目的】

子どもの貧困が社会問題になっている。NPO法人CASN(カズン)は、「子どもの権利条約」に認められている子どもの権利を尊重し、子どもたちの心に寄り添い、向き合い、子どもの心をしっかり受け止める地域社会をめざして活動をしている。子どもが安心して暮らすことができる環境づくりを、地域でどのように取り組んでいけばいいのか、NPO法人CASN(カズン)の活動を学び、宮津市の今後の取り組みに生かしていく。

【内容】

①谷口久美子さん(理事長)は、地域社会で子どもを育てようという考えで、人と人とのつながりを大切にして、さまざまな子供に積極的にかかわっていけるようなまちになればという思いから、1999年12月にNPO法人CASN(カズン)を設立した。現在、会員は70人になっている。

②カズンの活動は大きく分けて次の4つ。子供を支援する活動『しがチャイルドライン』、子育てをサポートする活動『スローな子育て』、子どもの活動体験『遊びの学校』、子どもたちに優れた文化・芸術を届ける活動『絵本・紙芝居・コンサート』

③子どもたちの多様化する悩みと様々な思いを受け止める、18歳までの専用電話『しがチャイルドライン』(全国チャイルドラインの滋賀県版)が開設されて16年。当初は月2回の開設であったが、着信件数も増えてきたことから、2013年から毎週金曜日に開設し対応してきている。フリーダイヤルを導入した2009年には1,800件に急増。2018年には3,580件となっている。

内容は、男子中高生からの性に関する相談が最も多く、近年は小学生を含む女子からの電話も増加している。また、大津市でいじめを苦に中学2年男子が自殺して以降はいじめに関する内容も増えている。

④2013年の1年間、大津市の支援を得てトワイライトステイの取り組みを行ってきた。生活保護世帯の子どもでひきこもりや虐待を受けている子どもを対象に、週1回午後4時から6時までの間、食事を提供したあと、大学生がついて学習支援を行ってきた。

トワイライトステイに参加している子ども全員が家族と食卓を囲んで食事をしたことがないなど、食に欠ける子どもたちばかりであることを目の当たりにし、地元商店街の空家を借りて、食べることの支援=子ども食堂を開設することと



なった。ところが、「子ども食堂は貧乏な子供が行くところ」という声が出てきたため、地元の自治会や民生委員などと、「実行委員会」を立ち上げ、すべての子どもを対象に「晴嵐みんなの食堂」を月2回開設した。しかし、参加者が80～90人となり、食事の提供だけで精いっぱいとなったため、小学校3年生以上に限定することとした。参加人数は20人ぐらいとなり、子どもの名前を覚えることができるなど、子どもとのつながりが深まった。食堂の開設が参加する子どもの居場所となり、子どもを核とした地域のつながりに一定の役割を果たしている。

⑤子ども食堂の取り組みの中で、要対協(要保護児童対策協議会)から、父親がタクシー運転手をしている父子家庭の中学校1年生の女子生徒のケースについてかかわってほしいとの要請があった。学校の先生が家庭を訪問しても父親とは話ができず、女子生徒も長年不登校気味で、地域で孤立し、ライフラインも止まる寸前の状態であったが、その女子生徒がカズンの特別食堂(要支援の子どもを対象にした食堂)に参加し、地域の支援を受けるなかで、昼間部の高校に通い、午前中は授業を受け、午後はアルバイトをして、しっかり生活と勉学を両立させているケースについて、谷口理事長から報告があった。

2 考察・検証・成果等

【小濃】

①「子ども食堂の取り組みは奥が深い。食べることを通して、地域の人をつなげて、子どもを孤立させないつながりができる場所の提供であるとともに、自分のためにいろんな人が手を差し伸べてくれることが意欲を持って頑張ろうという気持ちにもなるし、自己肯定感を育むことになる。さらに、年齢の異なるいろんな子どもや地域のいろんな人とつながることで、学校ではなかなか育まれない地域の『教育力』を育む場になっている。」と谷口理事長が子ども食堂の取り組みの意義や成果について語られていたことが印象的であった。この他にも法人設立の目的・趣旨に基づき子どもたちが住みやすい環境づくり・地域づくりのさまざまな活動を精力的にされていることに感銘を受けた。宮津市の取り組みに生かしていきたい。

②父子家庭の女子生徒のケースについて、本当にこんなことがあるのかと驚いたが、子どもの貧困がより一層深刻なものになってきていることの現れではないかと考える。宮津市での状況について私自身は把握できていないが、まずはしっかり実態を把握することが重要だと思う。

【長林】

子どもの貧困率は、全国で13.9% (7人に1人)、京都府では16.3% (6人に1人)。宮津市は就学援助の認定率30.24% (3人に1人)である。比較はできないが、それでも支援を必要としている子どもたちが大勢いることがわかる。滋賀県の貧困率は16.3% (6人に1人)であり、就学援助率は12.69% (8人に1人)である。

NPO法人CASNは、子どもの権利条約を基本とし、子どもの環境を良くする活動をと頑張っている。「間口は広く、思いはまっすぐに」をモットーに、自治会、社協、民生委員、健康推進委員、石山商店街振興組合、龍谷大学生、ソーシャルワーカー、CASNで「晴嵐みんなの食堂」を運営している。子どもを核にして地域がつながっている。石部南区学区まちづくり協議会も、NPO法人CASNの取り組みも、地域の人たちとのつながり、地域の人たちとの関係を持つことで孤立させないようにしている。地域(社会)で子育て

をする環境をつくり出している。やはり、地域（社会）全体で手をつなぐことが大切である。子どもも大人も、言っている環境・つぶやける環境が必要だと実感した。

トイレットペーパー・紙が1枚もない状況を想像できるだろうか。家に42円しかないという子どもの訴えから、時間をかけて、やっと父親と地域とが繋がった。ずっと拒んでいた父親は「いろんな人がいっぱい来てくれた。助けられました。本当にありがとう。」と言ったそうだ。人は寄り添って生きている。地域のみんなで子どもを育てる。今の社会に最も必要なことだ。貧困家庭も、身体・知的・精神障害や高齢の人も、孤立せずに地域で暮らす、宮津の課題でもある。